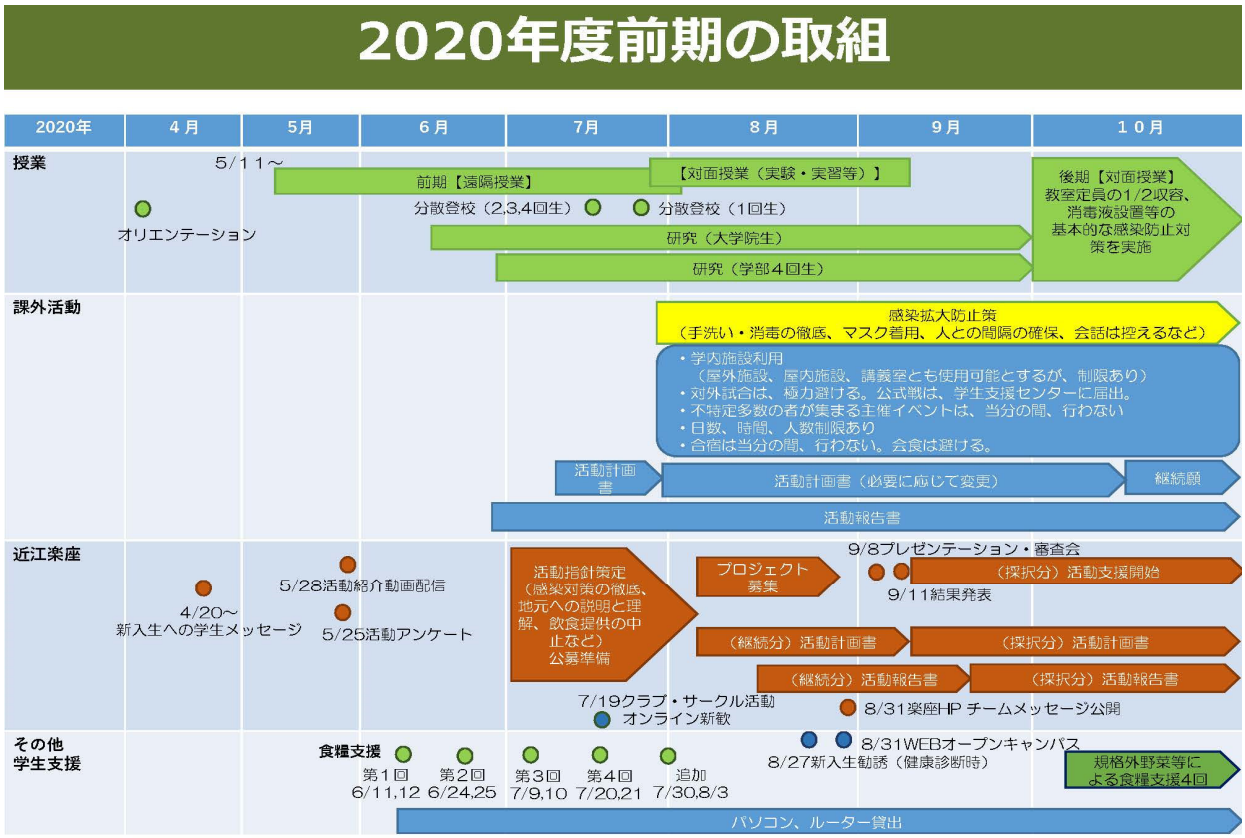
【特集】コロナ禍の取組

令和２年度コロナ禍の大学の対応

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、令和２年４月16日には全国的に緊急事態宣言が発せられた。このため、令和２年度前期の講義は５月11日から遠隔授業でのスタートとなった。７月下旬からは実験・実習などに限って対面授業が再開されたが、全面的な対面授業の再開は10月の後期からとなった。後期授業は教室定員の1／2収容や消毒液設置等の基本的な感染防止対策を講じた上で対面でスタートしたが、令和３年１月に本県近隣の愛知、岐阜両県、京都、大阪両府に再度緊急事態宣言が適用され滋賀県においても新型コロナウイルス感染症のステージが警戒ステージとなったことから、１月18日から原則遠隔授業に切り替わった。

このような中、近江楽座を含む学生の課外活動も活動停止を余儀なくされ、感染状況も落ち着いてきた令和２年８月から活動指針を策定し、活動計画書の提出、承認を経た上で、制限付きで活動が再開され、近江楽座については８月にプロジェクト募集、９月８日にプレゼンテーション・審査会を行いスタートとなった。

このように大学の教育、研究、地域貢献活動に大きな影響を及ぼした新型コロナウイルス感染症であるが、一方でオンラインを活用した新たな取組などが一気に進展した。このため、講義や学生活動、生涯学習など各分野でウィズコロナ、アフターコロナにおいてもこれまでの手法を見直し、より効果的、効率的なあり方に転換していく大きな契機となったものと言える。



コロナ禍での地域共生センター事業

１　地域教育プログラム

（１）地域共生論

教育面では、特に１年次前期の全学生必修科目である「地域共生論」は大きな影響を受けた。600 人以上が履修し、各回グループワークも交えて議論することで、他者を理解し、共感と豊かな対話を可能とするコミュニケーション力向上を目指す科目であるため遠隔授業のあり方を工夫し、テキスト「地域共生論」を活用しつつ毎回授業内容を配信し、主にコミュニケーション力の要素である「他者の立場に立って思いやる」課題を与え、レポート提出を課した。本授業の特徴である少人数のグループワークができず難しい部分もあったが、学生からはコミュニケーションの大切さ、地域との共生について考えられたとの感想も出された。（8 ﾍﾟｰｼﾞ参照）

（２）それ以外の科目

県内で活躍する企業人、地域人などを講師とする「コミュニティとライフデザイン」、「地域企業講座」は予め収録した映像の配信や企業作成の動画なども活用し企業をリサーチするスキルを身につける方法などを含む講義とした。また、社会課題についての考え方の手法を学ぶ「システム思考法」は学生の自主的な小グループでの意見交換も取り入れ、「滋賀県立大学での学生生活を充実させるために」のテーマについての提案書をまとめた。さらに、多様なゲスト講師を招く「SDGs と滋賀のグローカルイノベーション～近江の暮らしとなりわい～」や現地でのフィールドワークを含む「地域デザインＡ」は後期実施に変更しオンラインも併用した授業とした。（9～11 ﾍﾟｰｼﾞ参照）

（３）近江環人地域再生学座

令和元年度からリモートでの授業のシステムを整備していたため、通常の講義は遠隔実施で特に支障はなかったが、実践現場研修については実施時期を通常より遅らし、新型コロナウイルス感染症の感染状況が落ち着いた後期に実施した。（11 ﾍﾟｰｼﾞ参照）

（４）近江楽座

新型コロナウイルス感染症の影響で、近江楽座プレゼンテーションは 9 月に延期された。その後の活動も、感染防止対策行動指針に基づき月ごとに予め活動計画を近江楽座事務局に提出し承認を得られたものから実施し、翌月に活動報告の提出を求めた。

学生は基本的な感染防止対策の実施を前提に、関係する地元の皆さんなどと協議し取組を行ったが、飲食の提供や地域の方と密に接するような活動の自粛などこれまでと同様の活動ができなかった。一方で、学生たちが話し合いオンライン活用など工夫し、①定例会議のオンライン化、②イベント等のオンライン開催、③ネットショップ開設、④アーカイブ作成、⑤広報動画作成、⑥インプットの充実、準備活動、⑦これまでの活動の振り返りなど、コロナ禍を契機として新たな活動に取り組んだ。（12 ページ参照）

２　SDGｓの取組

（１）　キャンパス SDGs びわ湖大会 2020

令和 2 年 11 月 21 日（土）に『「子ども・若者」と「大人」がともに歩む SDGs の 10 年』をテーマに実施したキャンパス SDGs びわ湖大会 2020 は、これまでの対面開催から YouTube Live によるオンライン開催とした。これまで多くの参加者が県立大学につどい、活動発表、意見交換や交流をしていたが、残念ながらオンラインため、対面での交流はできなかった。しかしながら、オンライン開催で県内外から広く参加があり、また開催日以降にオンデマンドで映像配信をしたことから視聴回数は延べ 875 回になるなど、対面にはないメリットも見い出せた。（16～18 ﾍﾟｰｼﾞ参照）

（２）SDGs 連続講座

令和 2 年度はオンライン(Zoom を使用)で SDGs に関連する社会課題をテーマにした映画の上映会を開催し、上映後は、映画のテーマに関連する活動を実践されているゲスト講師によるショート講演、さらにグループ分けした連続講座参加者による感想や気づきを共有する情報交換の時間を取った。（19 ページ参照）

３　学生への食糧支援

コロナ禍で生活に困っている学生や留学生支援のため地域共生センターが呼びかけ、食糧支援を行った。

年度前半は、多くの教職員をはじめ卒業生など諸先輩、地域の皆さんなどからも大きな支援を頂いた。6 月から 8 月にかけて計 5 回実施した食糧支援の結果、支援を受けた学生は延べ 983 名で、配布した食糧は精米 1,960kg をはじめ缶詰、レトルトカレー、地元産の玉ねぎ、じゃがいもなど多品目に及び多くの支援ができた。

年度後半には地域の農業法人さんのご協力で規格外で出荷できない農産物などを頂き、多くの学生に配布した。配布は 11 月から 12 月にかけて計 4 回取り組み、受け取った学生は延べ 584 人、配布した野菜の総重量は約 430kg となった。

このことは SDGs の推進に取り組んでいる本学としても、SDGs のターゲットの一つである食品ロス削減につながるもので令和 3 年度も引き続き取り組んでいる。（22～23 ページ参照）

４　生涯学習

令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、対面の取組は全て中止した。一方で、オンラインを活用した公開講座を他大学とも連携しながら実施した。その結果、対面と比較し、より幅広い年齢層や県外など広範なエリアからの参加があり、今後もオンライン配信の併用を進める。（26 ﾍﾟｰｼﾞ参照）

（１）春期公開講座

5 月～6 月に各学部から推薦された講師による 4 回シリーズの公開講座を予定していたが中止した。

（２）公開講座

令和 2 年度は前期公開講義を実施すべく参加者を募集し準備していたが中止し、後期もコロナ対策で安全の確保が見込めないため中止した。

（３）オンライン公開講座

人間文化学部中井均教授による「安土城の謎を解く」をテーマにした 3 部構成のオンライン講座を実施し令和 2 年度末まで YouTube 配信した。

（視聴回数 1,465 回）

（４）サテライト・プラザ彦根特別講演会

サテライト・プラザ彦根の事業として、令和 3 年 3 月 15 日に長浜市市民協働部学芸専門監太田浩司氏の「明智光秀の生涯と近江 ～大河ドラマ『麒麟がくる』では麒麟が来たか？」をテーマに特別講座会を本学が企画・実施した。なお、この講演会は感染防止のため会場参加者を定員の半分以下の 27 名とし、希望者には YouTube 配信した。（視聴回数 149 回）

（５）びわ湖東北部地域連携協議会市民教養講座

びわ湖東北部地域連携協議会主催のオンライン配信による市民教養講座が実施され、本学からは環境科学部丸尾雅啓教授、人間文化学部中井均教授が参画した。